# Wallace Stevensの"The Rock"における無と救済

## Nothingness and Cure in Wallace Stevens' "The Rock"

#### 坂本季詩雄

### Kishio SAKAMOTO

Wallace Stevens wrote a poem called "The Rock" in his very later years of his life, at the age of seventy. The poem treats his life long theme as an artist, the relationship between reality and imagination, things and self, language and irrationality. The decline of his creativity tortured him at that time even though he was producing his artifacts with the consistent theme until his death at the age of seventy five. This paper focuses on the poet's attitude toward nothingness and cure mainly from the Jacques Lacan's psycho-analytic point of view, which would allow us to appreciate his poetic world of plenty.

はじめに

Wallace Stevensは最晩年に至るまで詩作をつづけ たが、衰えゆく詩的創造力と近づきつつあった死を まえに瞑想的な作品が多くなっていった。大学時代 の恩師で哲学者の、George Santayanaが晩年をロー マで過ごしたことに着想をえて、自らの心境を重ね た、"To an Old Philosopher in Rome"はその代表作 の一つである。しかし詩人の創作態度はそれほど変 わることなく初期から晩年まで一貫していたように 思われる。なるほど意欲の衰えはあったようだが、 常に新しい世界認識の枠組みを詩作を通じてのりこ え革新することを追い求めたのである。

この論文では、彼の作品にしばしば登場する言 葉、"nothing"と"cure"に焦点をあてて、"reality"と "imagination"、"things"と "self"、 "language"と "irrationality"の関連をおさえながら読むことにす る。今回取り上げるのは最晩年の作品、"The Rock" であるが、そのまえに初期の作品、"The Snow Man" をとりあげ、その中で使われる"nothing"意味につい て考察することにする。

#### I

Stevensはnothing, nothings, nothingnessを詩集の中 で生涯を通じて使用している。その数は総数158 回に及ぶ。まず比較的初期1921年作の、次の作 品を取り上げてみる。

#### The Snow Man<sup>1</sup>

One must have a mind of winter To regard the frost and the boughs Of the pine-trees crusted with snow;

And have been cold a long time To behold the junipers shagged with ice, The spruces rough in the distant glitter

Of the January sun; and not to think Of any misery in the sound of the wind, In the sound of a few leaves,

Which is the sound of the land Full of the same wind That is blowing in the same bare place

For the listener, who listens in the snow, And, nothing himself, beholds Nothing that is not there and the nothing that is.

"One must have a mind of winter"とはじまり、冬の

心のとらえた情景が以下に続く。冬の心について Vendlerは次のように述べている。

> Stevens saw that he conceived of himself as a poet of winter--of the moment when illusion has ceased... In short, Stevens' most authentic insight are those of a minimalist poet: his art is, he realizes, fully as laden with feelign as that of any other poet (and therefore not fleshless and skeletal); but the feelings are often the powerful wintry feelings of apathy, reduction, nakedness, and doubt.<sup>2</sup>

Vendler の指摘のようにStevensが"a poet of winter" であるなら、このSnow Manは詩人そのものといえ るかもしれない。作品ではアメリカ東部の冬景色 を、そこに作られたsnow manが眺めている。snow man は日本語のいわゆる人に似せて作った雪像であ る雪だるまであると思える。しかしそうとは断定し がたい工夫がされている。つまり上の意味であれ ば、snow と man の間をつなげるはずであるが、切 り放されているのだ。従って人の形象であるようで もあるし、冬景色の中にたたずむ人でもあるように 思える。

snow man にはなんらsentiment が与えられてい ないので、第5連に、"not to think / Of any misery in the sound of the wind, / In the sound of few leaves" と外界の自然に対峙しているのである。風と木の葉 の音はsnow man の立つ場所を満たすが、音もその 場所もsame とされるのは、そこに外界を認識する 精神が存在しないからである。もしその精神がそこ に存在すれば、difference,差異をそこで耳にするは ずである。

最終連で、snow man はnothing himself (彼自身 無)といわれる。ここもやはり彼が、冬の心、無そ のもの表象としてのただの雪像なのか、冬の心を持 つ人間がたたずむのかはっきりとはしない。しかし "I shall explain The Snow Man as an example of the necessity of identifying oneself with reality in order to understand and enjoy it"<sup>3</sup>というStevensの自注を 読めば、冬の心を持つのはやはりここに登場する "the listener"でありsnow manとも同一人物ではない かと思われる。いづれにしても詩人のユーモアと、 icon化することにより曖昧性がうまれ、詩的効果を ねらったものと思える。

その形象が見る二つの無、そこに存在しない無 と、そこに存在する無は、同じものなのだろうか。 文法的には存在する無には、"the nothing"と定冠詞 がつけてあることに気がつく。この定冠詞付きの無 は、Stevensが解説するように、冬のニュー・イン グランドの厳しい風景というリアリティーと同化し た"the listener "の認識をさすと考えたい。Stevensの 意図する、リアティーという概念を捉えるには一筋 縄ではいかない。ここでは、

Reality is the object seen in its greatest common sense.

Reality is not what it is. It oonsists of many realities which it can be made into. What reality lacks is a *noued vital* with life.<sup>4</sup>

という箴言集にあらわれた詩人の定義を意識してい くことにする。

一方"Nothing that is not"のほうは、そこでは意識 も無意識も存在できない。そして精神と自然、主体 と客体という二項対立の乗り越え、もしくは主格合 ーが達成されている。禅における無や、Coleridgeの いうトランセンデンタルな、"organic unity"のよう なものをさすのではないだろうか。ある批評家はつ ぎのようにStevensとの関係を示唆している。

> The notion of organic unity would appear to be the equivalent of what Stevens calls the "idea of order," that is, of unification of particulars according to an intuitive principle of the imagination.<sup>5</sup>

ここでは次の作品との関連から、この二つ目の無に ついては稿を改めて論証することにして、以下"the nothing that was"とあらわされた無について問題と する。

#### Π

The Rock (CP 525-28) 1950

I Seventy Years Later

It is an illusion that we were ever alive,

Lived in the houses of mothers, arranged ourselves

By our own motions in a freedom of air.

Regard the freedom of seventy years ago. It is no longer air. The houses still stand, Though they are rigid in rigid emptiness.

Even our shadows, their shadows, no longer remain.

The lives these lived in the mind are at an end. They never were ... The sounds of the guitar

Were not and are not. Absurd. The words spoken

Were not and are not. It is not to be believed.

The meeting at noon at the edge of the field seems like

An invention, an embrace between one desperate clod

And another in a fantastic consciousness, In a queer assertion of humanity:

A theorem proposed between the two--Two figures in a nature of the sun, In the sun's design of its own happiness,

As if nothingness contained a metier, A vital assumption, an impermanence In its permanent cold, an illusion so desired

That the green leaves come and covered the high rock,

That lilacs came and bloomed, like a blindness cleaned,

Exclaiming bright sight, as it was satisfied,

In a birth of sight. The blooming and the musk Were being alive, an incessant being alive, A particular of being, that gross universe. この作品の最初のセクションは"Seventy Years Later"である。作者とおぼしき人物が70年前を回 想する場面で始まる。この作品の制作年代は、詩人 の娘、Holy Stevensによれば1950年であり、彼 の最晩年の作品である。齢70でのStevens の心境 は次のようなものであった。

> What I want more than anything else in music, painting and poetry, in life and belief is the thrill that I experienced once in all the things that no longer thrill me at all. I am like a man in a grocery store that is sick and tired of raisins and oyster crackers and who nevertheless is overewhelmed by appetite.

(L604 23 June 1948)

創造力が枯渇していた1879年生まれの彼が、70年 前ふりかえるときには実年齢、1歳の頃を回想する ことになる。そのころの"the houses of mothers"のな かにすんでいた"we"の状態をLacan的に捉えてみれ ば次のようになる。

母と子が未分化で、母は子を自分に欠けている男 根の補足物として扱い、また子は母の欲望の対象で ある男根と同一化しようとする状態と考えられる。 この状態で経験することは、「言葉がそれを前にす ると停止してしまうような何かあるもの |、つまり 象徴化不可能な欲動のカオスである。Lacanはエ ディプス期を3期に分けて考えた。つまり第一期は 母とその子の関係が切り放されずにいた時期、父が その関係を禁じるために介入する第二期、そして父 の課した掟に従い、子は自分の母への欲望を無意識 の世界に押し込める、と同時に言語を獲得し、按と 秩序の世界、象徴界へと参入する第三期である。 Lacanはエディプスという神話を、個人の深層部に おける自然から文化への、つまり象徴秩序または言 語秩序への上昇過程の関門のモデルとして考えた。 過去を振り返れば第一期の状態があったとここでは 考える。

"we"が、欲動の渦巻くカオスの状態にいるとすれ ば、"our motions in a freedom of air" の"motion"は "emotion"と読みかえることも可能であろう。なぜな ら"emotion"は"stir""shake"をあらわすラテン語の "emovere"から生まれた語であるし、それはさらに "ex"+"movere"=>"ex+move"をあらわすものだから だ。ここで得られるのは、記号論的に見ればシニ フィエ/シニフィアンの関係が定まらない、完全な 記号的自由である。Lacanによれば、その自由を手 放す、または抑圧するかわりに、我々は言語という 法を獲得するのである。一方詩人は実際生活の糧を うるために、Harverd大学を中退した1900年以来、 亡くなるまで一貫して法律をあつかう仕事をしてき た。その彼の70歳の時点からの回顧がこの作品であ る。

欲動の渦巻いていた"the houses of mothers" は "rigid in rigid emptiness"とあらわされる。さらにそ れと同格としてあらわされている"mind"は"at the end"(終局)をむかえている。そこでは創造力の発 露である"the sounds of the guitar"も鳴り響かない。 "The words spoken"も存在しない。この状況を詩人 は"Absurd" 一語に込めてあらわしているように思え る。この言葉については、J. Hillis Millerが語源をた どって解説している。Millerはこの語の解説の中 で、inaudible, speechless, wordless, inexpressible, irrational, groundlessなどの意味を読みとろうとし ている。 6 聞くことも表現することもできないカオ ス的状態を、あらわしているのではないだろうか。 そこには詩人としての創造力の枯渇を嘆く姿をみる ことができるかもしれない。しかし彼の詩人として の信念、"Poetry must be irrational."7 を表現するた め、"absurd"な状態は創造力のわき出る状態をあら わすとポジティブに捉えうるのではないだろうか。

"The meeting at noon at the edge of the field"は二つ の"clod"(土くれでできた人間の形象)の出会いを あらわす。"clod"は、"consciousness"の中での出会 いの場を用意され、"theorem"(法則、定理)を持つ ことを提案される。この"clod"という位置づけは、 文化、象徴秩序、言語秩序へとたどり着かない状態 で、欲動のなすがままにいきる人をあらわす。だか ら法である意識の中で他者と出会うことにより、 Lacanのいうオイディプス期の最終段階へと参入す る。そこで単なる形象は、"blindness"を脱して、太 陽という認識の光の中で"a birth of sight"を得て、言 語世界へと参入する。

"As if" 以下には、"The Snow Man"にでてきた定 冠詞付きの"nothing"を思い出させる、"nothingness" が様々な内包を与えられながら使われる。"vital""so desired"と切望されるものは、"métier"(芸術家と しての技巧)、"assumption"(虚構性) "impermanence"(一回性)"illusion"(無根拠性)で ある。詩人の使う"nothingness"には上のようなもの を含むということになる。

このような内包をもつ"nothingness" のもとで、 "green leaves""lilacs"がものとしての形象"the high rock"を蔽う。蔽うことにより視界が開けるというパ ラドックスがここで見られる。その視野が永続しな いことは、"The blooming and the musk/ Were being alive, an incessant being alive,/ A particular of being, that gross universe."から明らかだ。このセク ションでの最終行で"a particular of being" (存在の 個別例) = "gross universe" (総体としての世界) と を、同一視することにも比喩的な逆説が含まれてい よう。このような二項対立をこえようとする試み は、"metaphor created a new reallity from which the original appears to be unreal ."(OP 195)と言葉の新 しい地平を開こうとする詩人の"métier"といえる。

"leaves""lilacs"という言葉から、Whitmanの Leaves of Grass, "When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd"を思い出す。leavesは"an incessant being alive"であるためには枯れた落ち葉ではなく、岩に 繁茂する青葉 (leaves of grass) でなくてはならな い。そしてこのleavesがWhitmanの作品と同じよう に彼の創作態度も思い起こさせる。Whitmanは詩人 を太陽に例えて、"As they (poets) emit themselves facts are showered over with light..."?と述べている ことや、完璧な詩の押韻と形式を、

> ... the free growth of metrical laws and bud from them as unerringly and loosely as lilacs or roses on a bush, and take shapes as compact as the shapes of chestnuts and oranges and melons and pears, and shed the perfume impalpable to form.(Whitman 1923)

と語ることと、Stevensのこの作品の第一セクション後半の太陽や草の葉、ライラックにこめたイメージは重なりをみせている。

Stevensは個人的に70年前を回顧するだけでは なく、現代詩人として様々な影響を受けてきた先行 する芸術家や彼らのメチエを回顧するのがこの作品 ではないだろうか。

#### III

#### II The Poem as Icon

It is not enough to cover the rock with leaves. We must be cured of it by a cure of the ground Or a cure of ourselves, that is equal to a cure

Of the ground, a cure beyond forgetfulness. And yet the leaves, if they broke into bud, If they broke into bloom, if they bore fruit,

And if we ate the incipient colorings Of their fresh culls might be a cure of the

ground.

The fiction of the leaves is the icon

Of the poem, the figuration of blessedness,

- And the icon is the man. The pearled chaplet of spring,
- The magnum wreath of summer, time's autumn snood,

Its copy of the sun, these cover the rock. These leaves are the poem, the icon and the man. These are a cure of the ground and of ourselves,

In the predicate that there is nothing else.

- They bud and bloom and bear their fruit without change.
- They are more than leaves that cover the barren rock

They bud the whitest eye, the pallidest sprout, New senses in the engenderings of sense, The desire to be at the end of distances,

The body quickened and the mind in root. They bloom as a man loves, as he lives in love. They bear their fruit so that the year is known,

As if its understanding was brown skin, The honey in its pulp, the final found, The plenty of the year and of the world.

In this plenty, the poem makes meanings of the rock,

Of such mixed motion and such imagery That its barrenness becomes a thousand things

And so exists no more. This is the cure Of leaves and of the ground and of ourselves. His words are both the icon and the man.

このセクションでは、"icon"(詩人や人間存在の 表象)としての詩が、現実を救済することを取り上 げている。救済されるべきものは、第一セクション の前半のような状況や、"ground," "ourselves"であ る。"ground"とは岩と人間が拠って立つ基盤であ る。つまりリアリティーと記号が出会うための基盤 である。

第一セクションでの"rigid emptiness"を救済する 必要があることと、そのためには現実である"rock" を"leaves"で覆うだけでは不十分だと、第一連で問 題提起される。現実を救済しなければならないとい うわけである。しかしなぜ"green leaves"で岩を蔽 い、絶え間なく生気にあふれた実在をつくりだすこ とでは十分ではないのだろう。ここではその理由を 救済するという行為の中に求めてみる。

現実の表象、岩を、記号の表象、草の葉が蔽うと きに、岩、地面、我々が救済されるという。救済を もたらすために詩人は、岩をさまざまなもので蔽っ ている。"The pearled chaplet of spring,/ The magnum wreath of summer, time's autumn snood,// Its copy of the sun, these cover the rock." 救済は現実 を変容させる行為である。この行為は単に情報を与 えたり記述したりする機能ではない。その発話行為 のプロセスそのものによって救済という「パフォー マンス」を実践し、遂行する機能をもった表現とい える。すなわち救済という行為の言及対象はその発 話行為なのだ。この救済は"They are more than leaves that cover the barren rock"と述べた後も、と どまらず比喩を遥か彼方へと重ねていくようですら ある。figurationによって、新しい感覚と意味が常に 生成され豊穣がもたらされる。

In this plenty, the poem makes meanings of the

rock,

Of such mixed motion and such imagery That its barrenness becomes a thousand things

And so exists no more.

言及対象はあらかじめ存在する実体ではなく、現実 の変容運動である救済という、行為のことである。 "This is the cure /Of leaves and of the ground and of ourselves."の主語は上述の言及対象をさしている。 発話行為はそのため一対一に対応することがなく、 一対多数のシニフィエ・シニフィアンのつながりを 生み出すことにならざるをえないのだ。つまりこれ は詩人にとっての信念、"Poetry constantly requires a new relation." (OP 202)の反映となる。この機能を 作用させない限り、彼が意図するような十分な救済 とはならない。

"a cure beyond fogetfullness"という表現は、現在 に至る様々な認識方法における伝統を意図的に忘却 し、その行為の彼方にある新しい、未発見の認識を 得ることを示すのである。あるいはHarold Bloomは Schopenhauerの崇高概念が、"forgetting"にもとづい ている、と指摘する中、

If we lose ourselves in the contemplation of the infinite greatness of the universe in space and time, ... we feel ourselves dwindle to nothing; as individuals, as living bodies, as transient phenomena of will, we feel ourselves pass away and vanish into nothing like drops in the ocean.<sup>8</sup>

というSchopenhauerの節を引用している。崇高を感 じるときには、忘我の境地でわれわれが"nothing"へ 還元されることと、この"forgetfulness"を結びつけ ることも可能ではないだろうか。そうすると"a cure beyond nothingness"を、現実をのりこえた救済の意 にとれ、上述のリアリティーを付与された岩との関 連も理解しやすい理解しやすい。

また"the figuration of blessedness"と述べる背景に は次の意味がこめられていよう。

> The incessant desire for freedom in literature or in any of the arts is a disire for freedom in

life. The desire is irrational. The result is the irrational searching the irrational, a conspicuously happy state of affairs, if you are so inclined. "The Irrational Element in Poetry"(OP 231)

既成の枠組みにとらわれずに、常に新しい認識(シ ニフィエ・シニフィアンの新結合)を求めることに 芸術家としての幸せがあるのだ。

"barrenness", "nothingness"を付与された"rock" は、"The Snow Man"のなかの、"the nothing that is" と同じである。"Things seen are things as seen. Absolute real."(OP 188)と, Stevensが述べる現実の ことなのだ。Vendler はそのような現実に"mind"が むかったときに、人間的記号体系の中にとりこむた め、かき立てられる欲望を次のように述べている。

> Desire, for Stevens, is always savage, and always fierce: to look into one's own heart, to come home to oneself, is to start anew each time at the ground zero of desire.

> > (Vendler 30)

ここでいう欲望のゼロ度とは、シニフィアンあるい はシニフィエがないことで意味を持つ記号のことで ある。いま、ここに存在していなくても、大きな影 響を持つのがこの記号の特徴である。これはたしか に"nothingness"の意味と機能を上手く説明してくれ る。人間の精神作用に捉えられていない、たとえて みればテレビカメラで捉えて、ブラウン管に映し出 されような、単なる「もの」も、いったん"rock"と 名付けられたとたん、記号体系へと取り込まれてし まう。ここでいう"nothingness"は記号体系の中にし かその存在可能な場所をもっていない。

#### IV

#### III Forms of the Rock in a Night-Hymn

The rock is the gray particular of man's life, The stone from which he rises, up--and--ho, The step to the bleaker depths of his descents . . The rock is the stern particular of the air, The mirror of the planets, one by one, But through man's eye, their silent rhapsodist,

Turquoise the rock, at odious evening bright With redness that sticks fast to evil dreams; The difficult rightness of half-risen day.

The rock is the habitation of the whole, Its strength and measure, that which is near, point A In a perspective that begins again

At B: the origin of the mango's rind. It is the rock where tranquil must adduce Its tranquil self, the main of things, the mind,

The starting point of the human and the end, That in which space itself is contained, the gate To the enclosure, day, the things illumined

By day, night and that which night illumines, Night and its midnight-minting fragrances, Night's hymn of the rock, as in a vivid sleep.

第三セクションはrockの本質がさらに明らかにな る。岩が灰色の"particular of man's life"とされるの は、記号の中に生きる人間の宿命をある意味では言 い当てている。つまり文字を書くことに含まれる下 にあげるような、逆説を詩人は知っている。

> The exquisite environment of fact. The final poem will be the poem of fact in the language of fact. But it will be the poem of fact not realized before.

> To live in the world but outside of existing conceptions of it."

(OP 190)

そのため現実に対して絶え間なく生成される、新し い詩的な意味を、第二セクションで"the whitest eye, the pallidest sprout"(純白の眼、ほとんど透明な白 の芽吹き)と名付けたことでおしまいにはできない のだ。

文字を書くことは文字通りの白紙を前にして 開始される行為ではない。いいかえると、現 実的な主体としても死の空虚の前にたたずむ ことではない。 書く人にとって、書くこと がどれほど新鮮で、未知の世界に挑むと映ろ うが、文字は白紙の上にすでに枠組みとして 書かれており、書くのは文字をなぞることで ある。書く人は、そうすることによって想像 の世界をぬけだした主体となる。けれども、 書くのが文字であり、書かれたものが文字と してのシニフィアンとなるかぎり、それはす でに書かれていたのだから、書くのは意味を 生み出さない。文字を書く人は、こうして意 味を生む主 体にはならない。<sup>9</sup>

詩人が現実である"the rock"を、"from which he rises, up--and--ho,/ The step to the bleaker depths of his descents"であるというとき、徳永は前半部分に "toward the heaven"を補い、人間の生死を思い浮か べている。<sup>10</sup>「人間は語ることによってそのつど生 と死を反復している」という意味で、次のようなこ とも想起される。

人間が言葉をはなすということの根底には、 原初 的な主体の死が横たわっている。生物 としての個は身体の死とともに消滅する。し かしながら、個がその歴史の出発点で、主体 の死と引き替えに手に入れた構造としても生 は、この個体の死を越えて存続するのであ る。なぜなら、構造としての生はもはや身体 ではなく、身体に対して「外ー在 ex-sister」 する他者l'Autreであり、この他者は言語や社 会というシステムLes systémesとして、個を 越えて伝達されてゆくからである。こうし て、人間は、主体の死と引き替えに、他者と いう「不滅の生」を獲得している。<sup>11</sup>

"rock" の様々な形をあらわすというこのセク ションのタイトルと、これまでのところから再びこ こで、Lacan的な見地より"rock"について考察して みる。象徴秩序を告知する他者を視点として"rock" を考える。"The rock is the habitation of the whole,/ Its strength and measure, that which is near, point A/ In a perspective that begins again// At B: the origin of the mango's rind."は、他者として豊穣なる 記号を生産しては、それらを解体する作業を行おう とする欲望の渦巻く場を確保すると考えられる。 Joseph N. Riddelの言及するような"rock"と"self"の関 係をみることができる。

The rock as both origin and end of self is discovered to have its own origin and end in the self; for the rock of reality has meaning only in the human, in the space-time of the mind.<sup>12</sup>

このように"rock"にたいするヒューマニスティック な見方をとるうほうが、超絶的な現実と見るより適 切に思える。つまり無を記号的体系の中には、決し て回収できないものという意味をここに見いだすこ とはできないからである。言語記号をあやつるラブ ソディストが無口になったり、"Its tranquil self, the main of things, the mind,// The starting point of the human and the end"を生み出す、出発点であり最終 点である。一方はシニフィエ・シニフィアンの結節 のはずれた欲動の渦巻く場、たぶんここでは"vivid sleep"、"evil dreams"へと、他方言語秩序の支配す る"enclosure"へとつながる"gate"となる。" rock"が 意味生成のための空間であってなおかつ地点であ り、記号により生きる動物の宿命として人間は、そ こを上昇、下降し記号の救済と死の両方を求めずに いられないのだ。

#### V

無と救済を中心テーマとして、"The Rock"を読ん だ。詩人にとってのオブセッション、"absolute real"をどのように記号体系の中にirrationalなかたち で回収するかは、生涯を通じて作品の中に見ること ができる。今回、救済を宗教的な意味で考えること をいっさいやめて、言語行為として考察することに した。行為としての救済には真理/虚偽ではなく、 成功/失敗かが判断基準となる。そして一対多にむ すびつく意味的な過剰を力として、二項対立の枠組 を侵犯し、既成の言語秩序を壊乱する。その結果静 的な記号としてではなく、肉体的な動きを言語に持 ち込み、意味的な生成死滅のダイナミズムと豊穣を もたらす。老境に達した詩人の"night-hymn"は読者 に、このような言語ゲームへ参加するように誘惑する。

注

この論文は1994年第33回アメリカ文学会全国大会 での発表に加筆訂正を加えたものである。

 Wallace Stevens, *The Collected Poems of Wallace Stevens* (New York: Random House, 1982), p.
9-10.以下のStevensの詩の引用はこの版による。本 文中にCPと略記しページを記する。

この版による。本文中にOPと略記しページを記する。

2 Helen Vendler, Wallace Stevens: Words Chosen Out of Desire (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1985), p. 36-37. 以下のこの書籍 からの引用はこの版による。本文中にVendlerと略 記しページを記する。

3 Wallace Stevens, *Letters of Wallace Stevens*, ed. Holly Stevens (New York: Alfred A. Knopf,1966), p. 464. 以下のStevensの手紙の引用はこの版によ る。本文中にLと略記しページを記する。

4 Wallace Stevens, Opus Posthumous (New York: Knopf, 1989), p. 195 以下のこの書籍からの引用は 5 Margaret Peterson, Wallace Stevens and the Idealist Tradition (Ann Arbor, Michigan: UMI R esearch Press, 1983), p. 55.

5 J. Hillis Miller, "Stevens's Rock and Criticism as Cure" in *Wallace Stevens* Harold Bloom ed. (New York:Chelsea House Publishers, 1985), p. 29.

7 Walt Whitman, "Preface to Leaves of Grass" in *The American Tradition in Literature*, vol. 1, 5th ed. Sculley Bradley ed. (New York: Random House, 1981), p. 1929. 以下のこの書籍からの引用はこの版による。本文中にWhitmanと略記しページを記する。

8 Harold Bloom, *Poetry and Repression: Revisionism from Blake to Stevens* (New Haven: Yale University Press, 1976), p. 284

 佐々木孝次「何もしないこと--共同体と死 3」 『エロスとタナトス』Imago Vol.3-3(東京:青土社、 1992), p. 242.

10 徳永陽三『アメリカ現代詩と無』(東京: 英潮社出版、1990), p. 66.

11 「死の構造ーマゾシズムと死の欲動」『エロスとタ ナトス』Imago Vol.3-3(東京:青土社、1992),p. 160-161. 12 Joseph N. Riddel, *The Clairvoyant Eye: The Poetry* and Poetics of Wallace Stevens (Baton Rouge : Louisiana State University Press, 1991), p. 250.

平成7年3月20日受理